大阪大学外国語学部イタリア語専攻
海外語学研修とFiera del Lavoroにおける国際交流

海外交流

菊　池　正　和*

Department of Italian in School of foreign studies has overseas exchange initiatives including language training at the University for foreigners of Siena and a job fair in cooperation with the Consulate General of Italy in Osaka.

Key Words：University for foreigners of Siena, Fiera del Lavoro

はじめに

外国語の習得はもとより、他国・他地域の歴史や社会、文化や生活様式を本当に理解するためには、海外との直接的な交流が必須であることは論を待たない。日本で外国語や外国の歴史、社会、文化を教える者にとって、学生に対して、いかにして多くの海外交流の機会を提供できるか、といったことは常に意識しておかなければならない課題であろう。外国語学部イタリア語専攻でも、できるだけ多くの学生に実際のイタリアを体験してほしいと願っており、留学を積極的に推進している。最初の留学は、現地の空気を思いっきり吸い込み、楽しんで、その国のことを出発前より好きになって帰ってくればそれだけで成功だと、折に触れて、学生には話している。しかし、就職活動の長期化等の影響もあり、すべての学生が長期留学に踏み切れないのも実情である。専攻としては、長期休暇中あるいは普段の課程の中でも、学生とイタリアとの出会い、交流の場を創れないかと常に模索している。

本稿では、その中から2つのイニシアチブについて紹介したい。夏季休暇期間に実施している国立シエナ外国人大学での語学研修と、在大阪イタリア総領事館との共催で毎年学期中に実施しているイタリア関連企業の就職フェア「フィエラ・デル・ラヴォーロ」である。

* Masakazu KIKUCHI
1973年6月生まれ
京都大学大学院　文学研究科文献文化学専攻　イタリア語学イタリア文学専修博士後期課程単位満期退学
現在、大阪大学大学院　言語文化研究科言語社会専攻　准教授　文学修士
専門／イタリア演劇、シチリア文学
TEL：072-730-5223（研究室直通）
FAX：072-730-5223
E-mail：m_kikuch@lang.osaka-u.ac.jp

シエナ外国人大学での夏季語学研修

外国語学部イタリア語専攻は、2020年7月現在、シエナ外国人大学、パレルモ大学、ペルージャ外国人大学と交流協定を結んでおり、数年のうちにはミラノ大学、ヴェネツィア大学との間にも交流協定が結ばれる予定である。その中で、現在夏季休暇中に2年生の大部分が約1ヶ月の語学研修を行っているのが、シエナ外国人大学である。

トスカーナ州にある古都シエナは、歴史的に見ても、イタリア語やイタリア文化を世界に発信する拠点であったと言える。1588年にイタリアで初めてドイツ人学生に対するイタリア語の講座が開かれたほか、統一イタリア王国誕生後、イタリア語・イタリア文化の講座が最初に設置されたのも、1917年のシエナ大学であった。その後、2004年に、国際化のプロセスに対応する中で、イタリアの言語、文化、社会、経済の研究教育とその発信に特化した形で独立したのが、シエナ外国人大学である。イタリア人学生を対象に、第二言語としてのイタリア語教育やイタリア文化発信の専門家を養成するコースと、外国人学生を対象に、イタリア語やイタリア文化を教授するコースが並置されており、いずれも博士課程まで有しているほか、多くの研究センターも併設されている。その研究教育の高い質に関しては、優れた言語普及のプロジェクトに対して欧州評議会が授与するラベルをすでに5回も受賞していることが証明している。また、本学イタリア語専攻の学生が研修を行っている言語教育センターも、2015年に、国際的にも高い標準規格であり卓越した言語教育の質を証明するEAQUALS（Evaluation & Accreditation of Quality in Language Services）の認証評価を受けていることも付記しておきたい。

さて、この夏季語学研修は、異文化社会に直接触れることを通して、国際的感覚を涵養し、将来、国

際社会において活躍できる素地を育成することを目的としている。受け入れ先である言語教育センターのカルラ・バーニャ教授との綿密な打ち合わせを通して、80時間の語学研修と、10時間の課外活動、インターンシップを組み合わせたプログラムを作成した。

語学的な到達目標としては、参加者全員がCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）基準におけるB1レベル（自立した言語使用者・中級）の運用能力を獲得することとしている。研修初日にプレイスメント・テストを実施し、学生たちは習熟度別のクラス編成に振り分けられる。この語学研修では、本学の学生のために特別クラスを編成するのではなく、様々な国からイタリア語を習得しに来ている外国人学生とあえて一緒に学ばせている。語学習得上の効用もさることながら、学生には多くの国からの留学生と交流することで、国際的な視野を広げてほしいとの願いからである。

また、課外活動においては、シエナの歴史や美術に関する文化講座に加えて、1472年に創業した、現存する中で世界最古の歴史を持つモンテ・ディ・パスキ・ディ・シエナ銀行や観光インフォメーション、ワインの輸出会社等でのインターンシップ型の実地研修を行っている。研修地であるシエナの歴史や文化、地場産業に対する理解を深めるとともに、実地における取材や作業等を通して、より実践的なコミュニケーションスキルを身につけることも目的としている。

このシエナ外国人大学での夏季語学研修を始めて5年が経過したが、帰国後の学生からのヒアリングや授業中に垣間見られるイタリア語の運用能力、あるいは意欲の変化から、これまでの成果をまとめると以下のようになる。まず、語学習得に関する参加学生の気づきは、実践機会の不足と社会的・国際的な視野の狭窄である。現地で履修した文法項目に関しては、そのほとんどを本学で2年次前期までに学習していたが、その説明をイタリア語で聞き取り即座に反応すること、習得した語彙や文法を駆使して意見を表明することに関しては、困難や当惑を覚えたということである。そこには語学能力の不足だけではなく、日頃の生活において、社会的・国際的な問題へ関心を持って熟考し、自らの態度を決定するといったプロセス自体の不足もあったことを反省していた。また、語学習得以外の部分でも、異文化（習慣や思想等）に触れることで新しい知見を得ると同時に、自国や自文化を見つめ直し、改めて両者の相違を体感したり、あるいは自らの無知に思い至ったりしている。ほとんどの学生が、本研修の経験を今後の学習や人間的成長の契機ととらえており、大きな成果があったと評価できる。

写真1　シエナ外国人大学 言語教育センター

Fiera del Lavoro（イタリア関連企業就職フェア）

1990年代前半に端を発した「イタリアブーム」は、いわゆるブームの枠を超え、日本の文化の中に包摂され、すっかり定着したように思われる。従来からの美術や建築、歴史などに対する学術的な興味に加え、料理やファッション、サッカーといった生活文化への関心の高まりやイタリア人のライフスタイルへの憧れが牽引する形で、イタリア語の学習者人口も順調に数を伸ばしている。

しかし、イタリア語を用いたビジネス需要となると話は別である。少なくとも、文化の定着や両国の往来人口と比例してイタリア語を運用できる人材のニーズが高まっているという状況にないのは確かである。イタリア語専攻を卒業しても、イタリア関連の職に就く学生が毎年数名いるかいないかという状況は、教員としてももどかしい思いであった。

そこで、在大阪イタリア総領事館との共催で始めたのが、イタリア関連企業の就職フェア「フィエラ・デル・ラヴォーロ」である。2014年から年に2回のペースでこれまで計9回、延べ27社に参加いただいて実施してきた。日本に進出しているイタリア企業や、逆にイタリアに進出している日本企業の代

表者や人事担当者を毎回3名ずつお招きし、前半は各社に30分ずつ事業内容や欲しい人材像などについてお話しいただき、後半90分は各企業の方を取り囲んで、学生が自由に質問する形式をとっている。総領事館と共催という形で、総領事自身にも毎回ご臨席を賜っていることもあり、毎回、日伊双方名だたる企業に参加いただいている。学生たちにとっては、通常の堅苦しい就職活動の場ではなく通い慣れた大学の教室で、自由に質問をしながらイタリアでの仕事に触れられるまたとない機会となっていると自負している。また、参加していただいた企業の方々からも、イタリア語が運用できる学生との直接の交流の場に御好評をいただいている。現在までに、この「フィエラ・デル・ラヴォーロ」がご縁となり就職にまでつながった学生も複数名おり、嬉しい限りである。今後もフェアを続けていき、1人でも多くの卒業生が、イタリア語の運用能力やイタリアの文化や社会の理解を活用できる職業に就いてくれることを願うばかりである。

写真2　就職フェア学生向け案内フライヤー

写真3　就職フェアの様子

おわりに

2020年7月現在、世界におけるコロナウイルスの流行は、まだ収束の兆しを見せてはいない。ヨーロッパにおいて最初に感染が爆発したイタリアにおいても、ピークは過ぎたものの、北イタリアを中心にまだ予断を許さない状況にある。仕方のないことではあるが、留学など人的な交流はストップしており、7月1日以降日本人のイタリア入国は可能になったとはいえ、今年度はシエナ外国人大学での夏季語学研修は見送らざるを得ない。また、「フィエラ・デル・ラヴォーロ」についても、現時点で開催の目途が立っていないのが実情である。勿論、専攻としては、教員が中心となって、学生たちが少しでも生のイタリアに触れることができるような仕掛けや場を作っていきたいと模索している。ビデオ会議システムなどを利用した交流も現代的な1つの形かもしれない。だが、実際に同じ空間に集い、語らい、場合によっては肩をたたき合うような物理的な交流が、特に若い学生たちにとって重要であることは自明のように思われる。一刻も早い交流の再開を願いつつ、学生たちの外に羽ばたく意欲を後押ししていきたい。